

[投稿]

PICE 全国大会出席体験記

日下部 治 Osamu KUSAKABE

正会員 アジア土木技術国際会議担当委員会委員長 Ph.D. 東京工業大学教授 工学部土木工学科

キリスト教布教のため上陸しようとしたマゼランが1521年現地の英雄ラプラプに殺された島として知られるマクタン島から、OECF（旧・海外経済協力基金、現・JBIC国際協力銀行）のファンドで建設された第二マングアエマクタン橋（学会誌'99年5月号参照）を渡ったところにある、フィリピン最古の町 Cebu 市で開催されたフィリピン土木学会（PICE）の第25回全国大会に参加する機会を得た。この参加は、JSCEの国際委員会が進めている協定学協会との交流推進の一環であり、1998年にはPICEの当時の会長 Cruz氏も神戸で開催された第53回の土木学会全国大会を視察している。今回は、アジア土木技術国際会議担当委員会委員長として、また1999年9月にJSCE、PICEら5学会で発足したアジア土木学協会連合協議会（略称 ACECC、学会誌'99年2月号参照）の Secretary General として招待されたものである。11月25日から27日まで3日間の第25回大会はマニラ市以外の地で初めて開催された全国大会である。参加者は5300人という極めて大きな会議で、その半数が職場から補助を受けて参加している行政関係者であると聞いた。PICEの会員には必要な学歴を持ちかつ試験合格した人しか入れないため、ボランティア以外の学生会員は参加できない。JSCEの全国大会で学生会員を除いた参加者はこれほど多くはないのではないかと。会場はカジノもある大ホテルで、メイン会場は2000人以上収容できると推測されるほどの規模であった。大会参加費は早期申し込み者が2200ルピー（7千円弱）で、講演集、2日間の昼食と午前・午後のスナック、参加証明書がすべて含まれている。これほど安くできるのは、各方面から多くの寄付を募る努力をしているからだとい

う。大会を会場に使いながら全国大会の参加費をさらに高くしようとしている JSCE とは大違いである。

24日現地到着後、夕方に開催されたPICE理事会への参加を要請され、会長からJSCEからの参加であると丁寧な紹介を受けた。その場で行われたPICEと中国土木水利工程学会（台湾、CICHE）との協定調印式に立ち会うことができた。いずれもACECCの発足時のメンバーであり、9月のACECC設立時を契機に今回の調印にいたった経緯を、CICHEのCheng会長とPICEのRasuman会長から聞き、ACECC設立の効用の一部を確認して大変うれしく思った。

25日朝、10人ずつのテーブルが150か200も並べられたメイン会場での開会式は、ポリウムいっぱい音楽の中、会長、National secretaryの入場に引き続き、98支部の支部長が旗とともに入場、演台に旗が次々に並べられ、歌手による賛美歌と国歌の後に、セブ市長の祝辞が始まるといった式次第で、ASCEの全国大会を思わせるお祭りの雰囲気であった。会長の開会の挨拶の中で、ACECCの設立および本大会へのJSCE、CICHEからの参加者があることが紹介された。

Keynote speaker は、エストラデー大統領の閣僚等の辞表提出命令の騒ぎで急遽交代となり、Flagship プロジェクトの大統領府コミッションの次官である Manuel Gaita氏が務めた。その中で彼は、道路舗装の改修、橋梁の付け替え、マニラ地区の外郭道路整備、LRT（軽量高架鉄道）延伸計画、空港、港湾整備、マニラ地区の3か所の廃棄物処分場建設計画、マグロを中心とした漁業施設整備など広範囲な公共事業計画を示した。午後の技術講演では、1999年8月に発生した地滑りの災害調査報告、



写真-1 会長とセクレタリーの入場



写真-2 国歌の斉唱



写真-3 ラスマン会長と筆者

フィリピンの地震特性、台湾震災の教訓など自然災害に関する講演が続いた。

2日目の講演は Module-1 : Construction Management and Engineering / Civil Engineering Practice, Module-2 : Geotechnical Engineering / Structural Engineering, Module-3 : Transportation Engineering / Water Engineering の3会場で行われ、Module-2 での筆者の講義時には1000人位の人が熱心に聞いてくれた。講演者を集めての Open Forum での質疑には講義とは直接関係のないと思われるような多くの質問もあり、いずれも設計実務の悩みに関するものが多かった。

全国大会のクライマックスは、二日目午後の次期理事の選挙である。会員25人あたり1名の代議員が選ばれ、その代議員達と限られた数の終生会員による直接選挙が行われる。直近3名の会長経験者からなる推挙委員会による28名の候補者の中から15名の理事を選出する。PICEの理事枠は、産業別に決まっている。それは行政関係の土木技術者集団 Philippine Society of Civil Engineers (PSCE) と民間技術者による Philippine Association of Civil Engineers (PACE) が1974年に合併して以来、両者の理事枠はそれぞれ7名ずつ、会長も両分野で交代との合意ができてきていることによる。なお最高得票者は分野枠に限らず理事となり、総計15名で理事会が構成される。JSCEの理事会構成との比較のために各分野別の理事枠を記しておこう。民間分野(建設産業3名、コンサルタント3名、教育関係1名)、行政分野(中央行政4名、地方行政2名、公社、公団1名)。これと比べJSCEではなんと大学関係者の比率が多いことか。

PICEの事務局長 Nanette 女史の話によると事前の選挙運動も盛んなようであるが、この支部からの理事候補者の推薦、全国大会での民主的な投票が会員のPICEへの参加意識、帰属意識を強め、かつ、なによりも全国大会への参加者を増やしている原動力になっているようである。地域別、分野別理事枠や会長のローテーションのルール、理事選出過程など一般会員にはよく知らされていないJSCEの理事選出の実態とは透明度において大きな違いがある。

午後5時から始まった766票の開票作業は午後10時によく終了し、結果が確定した。選出された新理事の年齢層は83歳から40代前半と幅広く、また現理事の半数が当選するバランスのとれた結果と感じた。Rasuman 現会長の配慮で新理事の会合の場に筆者も招かれ、理事の互選による会長、副会長などの主要役員選出の様子を見た。元会長の選挙管理委員会委員長の議長のもと、無記名投票で会長を決定すべきなどとの意見がなされたが、結局は口頭での推薦方式で、新会長にはコ

ンサルタントの枠で当選した現第一副会長の Sison 氏、第一副会長には公共事業庁(DPWH)次官 Bonoan 氏がすんなり選出された。あるグループによる事前の根回しがあったのであろうか、今回はとても“平和的”に選出が行われたということであった。なお Bonoan 氏は、ACECC が2001年4月、東京で開催する第2回アジア土木技術国際会議(2nd CECAR)時のPICE会長になる可能性が高いようである。新理事の会合後はカジノ内のレストランで新会長の招待によるパーティが開かれ午前2時近くまで続いた。そこでの新会長との話の中で、PICEはJSCEと各技術分野での交流を期待していること、ACECCへの活動に協力的であることなどが確認できた。

最終日は、朝から会議参加の証明書を受領する長蛇の列が続き、肝心の技術講演会は参加者が少なく、3会場を1会場にまとめて行われた。その直後、閉会式の会長の短い挨拶後富くじの抽選会が行われ、外れた人は順次席を立っていくといういわば流れ解散のような幕切れであった。

初日のテープカットで始まった会場には52の技術展示ブースが設置されにぎわっていたが、講演者の半数が技術展示のブースの担当で、当然彼らの講演内容はコマース色が強く学術、技術情報としての偏りがあるように思えた。また会場には記念のTシャツやセブ島の物産などを売るお土産店も多く並び、そこも人、人の集まりであった。それを見るとPICEの全国大会の役割は、JSCEの学術や技術情報交換に特化した全国大会のそれとは大きく異なっているとの印象が強い。しかし、フィリピン大学の国立交通研究センター(NCTS)のCal博士は、3会場のパラレルセッションの実施や海外からの講演者の招待は今大会からで、今後さらに会議内容を学術、技術情報交換へ重点を移すことや、全国各地での大会開催の必要性を語っていた。

今回、日本からの参加は筆者と他の仕事で同行していた今泉繁良宇都宮大学教授と竹村次朗東京工業大学助教授の3名であった。そのほか、気がついた中では、現地で仕事に携わっているコンサルタント会社の講演者とその補助者がいた。しかし、これらの方は、PICEの人が楽しみにしている Open Forum の質問時間前に会議運営者に告げずに退席してしまうなど、あまり協力的ではないとの印象を受けた。JSCEとして協定学会への国際協力できることは少なくない。JSCEからの講演者の派遣の継続や、現地で活躍されるJSCE会員のもっと積極的な参加が将来期待される。海外学協会との協力協定の趣旨にそった実を挙げるために、国際委員会の役割は大きい。今回のPICE全国大会参加は、学協会の国際交流を考える上で貴重な体験であった。